

〔様式 1 1〕

（対象事業：平成 1 7 年度芸術拠点形成事業（展覧会事業等支援）

）

事業名：僕たち古代人 古代のムラをつくろう Part.2

事業者名：千葉県立房総のむら

連携事業館名：

住所：千葉県印旛郡栄町竜角寺 1 0 2 8

TEL：0 4 7 6（9 5）3 3 3 3

FAX：0 4 7 6（9 5）3 3 3 0

HPアドレス：<http://www.chiba-muse.or.jp/MURA/>



### ①施設概要

原始・古代から近現代までの衣・食・住・技の変遷を展示や実演によって再現し、来館者が伝統技術や生活様式を直接体験することによって学ぶ体験博物館である。昭和 6 1 年に開館し、平成 4 年に全施設が完成、平成 1 6 年に風土記の丘を統合した。資料館 1 棟、文化財建造物 3 棟、再現建物 2 4 棟などの施設をもつ。

### ②事業の意図目的

昨年度は古墳時代後期の竪穴住居を復元し、伐採から生活技術までさまざまな体験を通じた学習は大きな成果をあげた。これを一過性のものとせず、住まいの歴史を知る場あるいは原始古代の生活技術を体験する場として提供することを目的として時代の異なる複数の竪穴住居を効果的に配置するために弥生時代中期の竪穴住居を復元した。また、昨年度以上の体験者を募ってより大きな学習効果をあげるよう努力した。

### ③事業概要

- 1 伐採体験 原始の石器、古代の鉄器、現代ののこぎりを用いて立木を伐採し、道具及びその使い方の歴史を学習した。
- 2 竪穴住居復元体験 専門職員及び専門家の指導のもとで、弥生時代中期の竪穴住居 1 棟を児童・生徒及び一般ボランティアが復元した。
- 3 原始古代生活技術の体験 復元した竪穴住居の中あるいは周辺で、石庖丁作り、琥珀玉作り、火起こし、塩作りなど古代の生活技術の体験学習や古代食の試食を行った。

上記の体験学習は、栄町立酒直小学校など近隣の学校との連携の上で、さらに参加者（一般ボランティア）を募集して実施した。

### ⑥事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他（ ）  
作成した報告書等  
ビデオ（ ）  
冊子（ ）  
その他（ ）

### ⑦参加者状況

参加者人数 延べ 4 4 8 人

内 訳 近隣小中学校児童・生徒 2 1 9 人（団体参加：栄町立酒直小学校、個人参加：5 校 1 5 人）、一般ボランティア 2 2 9 人

### (1) 事業の実施状況について

今回の事業も、すべての工程を体験演目として実施している。学校との連携を最も重要と考えたが、恒常的に連携して実施したのは栄町立酒直小学校である。学校団体として恒常的に連携することは交通手段や学年の児童・生徒数の問題から無理があるため、近隣各学校の協力で個人的な児童・生徒の参加を呼びかけた。また、それと並行して一般ボランティアを公募した。

竪穴住居の復元を行った場所は、昨年度復元した古墳時代後期の竪穴住居の隣接地である。埋蔵文化財の取り扱いについては昨年度の試掘の結果に基づいて千葉県教育庁教育振興部文化財課と協議が行われ、工事を慎重に実施することで協議が整った。

復元作業に先立って、11月22日に予定地の樹木の伐採を行った。伐採対象の樹木のうち幹が細い2本について、栄町立酒直小学校6年生の伐採体験に用いることとした。伐採体験は同日行われ、酒直小児童は石斧による伐採を主に、鉄斧と鋸も併用して道具の変遷、進化を体感した。

竪穴住居の復元作業は11月24日から着手した。同日から12月6日まで、竪穴の掘削、床貼り、床固め、柱穴の掘削を実施した。竪穴は70～80cmの深さとした。床面は実際の高さよりもさらに30cm掘り下げて、防湿のためのビニールシートを敷きこんだ。完成後に連日火入れを実施することができないためのやむをえない措置である。

12月4日及び15日に個人参加小中学生と一般ボランティアを対象として、12月6日及び13日に酒直小学校6年生を対象として、石庖丁製作体験を実施した。今回は弥生時代の竪穴住居を復元することから、同時代の代表的な生産用具である石庖丁を対象として選んだ。素材としては裁断された粘板岩を用い、敲打によって荒割りをし、荒砥で研磨、石錐で穿孔を行った。また製作後に、当館水田に残っていた二番穂を利用して穂摘み体験を行った。

12月7日及び10日には、茅葺きの小さ



写真1 伐採体験



写真2 石庖丁作り体験

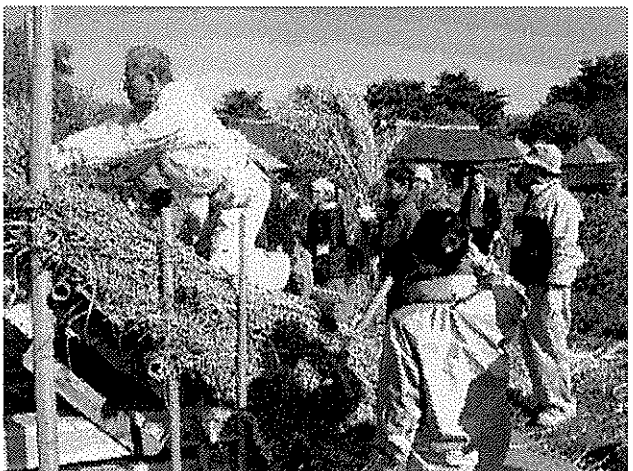


写真3 茅葺き技術実演・体験

なモデル屋根を設定し、近世以来の茅葺き技術の実演、体験を行った。昨年度復元した古墳時代の竪穴住居の屋根との対比や共通する基本的な技術の習得などの学習を行った。

1月20日及び21日には壁の整形と壁板の設置を実施した。また20日には、同時に酒直小学校6年生を対象として、復元済みの竪穴住居を使ってその内部での火起こし体験からかまどへの火入れを行った。現地は全体に緩やかな傾斜があるが、昨年度は対象地を整地してから竪穴を掘削したのに対して今年度は整地を行わないで竪穴を掘削した。そのため壁の高さを若干盛土によって調整する必要があった。

1月12日から25日にかけて、柱立てから木組みの工程を実施した。柱穴の底面には柱材を受ける底板を入れた。12日に柱を立て、13日に桁、梁を架け、さらに垂木を架けていった。14日の大雨と21日の大雪によって予定が遅れたが、20日までに垂木を架け終り、25日に入口部分の屋根を作った。

1月28日から屋根の茅葺きを開始した。1月31日には酒直小学校6年生が茅葺きを行った。最終的に屋根が葺きあがったのが2月11日で、その間の実働日は6日間であった。昨年度の復元の際には「本葺き」を採用したが、原始・古代は「逆さ葺き」であったと想定されることから、今年度は「逆さ葺き」を採用した。古墳時代の竪穴住居を本葺きで葺いたことは事実と反している可能性もあるが、それを前提とした上で、茅の葺き方の対比が可能となった点で逆に学習上の効果も期待できる。

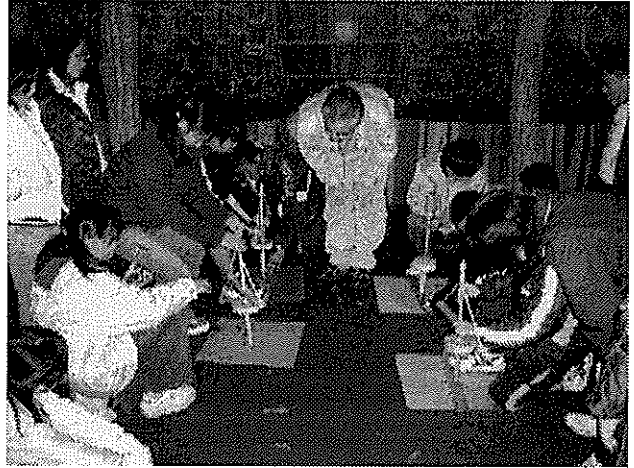


写真4 竪穴住居内での火起こし体験



写真5 小学生による木組み

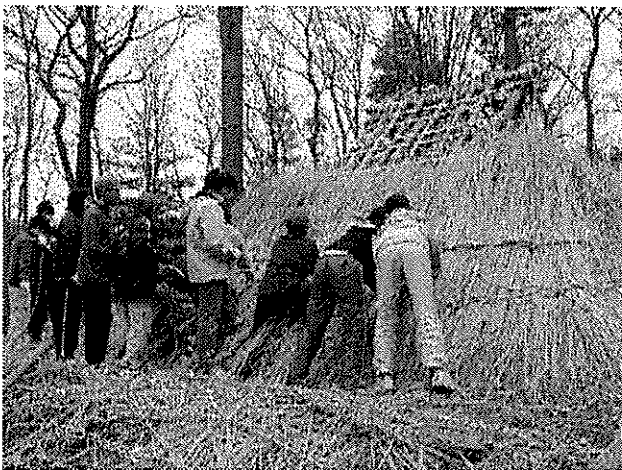


写真6 小学生による茅葺き

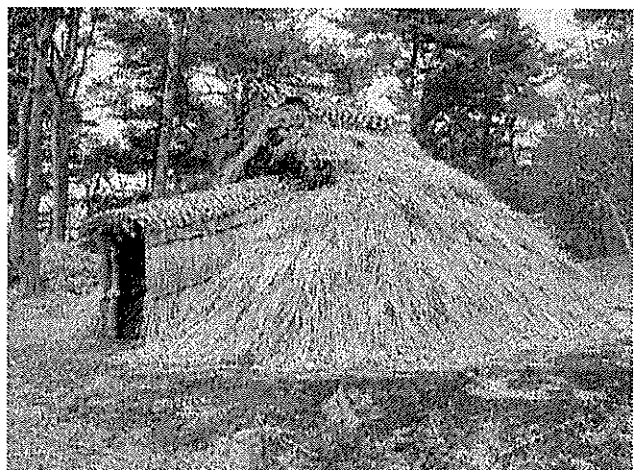


写真7 完成外観



写真8 入口付近

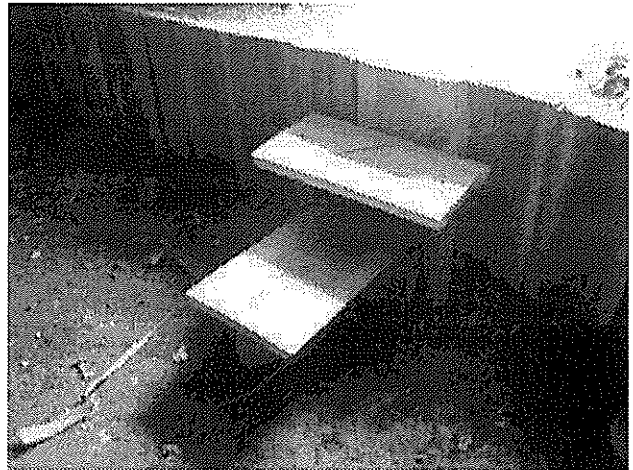


写真9 対比の実例（古墳時代後期の階段）

屋根葺き完成後の2月12日、入口に階段（一本梯子）を架けて内外観とも完成した。完成後の体験として、2月17日（酒直小学校6年生）と25日（個人参加小中学生及び一般ボランティア）に、火起こし、原始古代食体験を実施した。食体験では、甕形土器で古代米を炊いたものと甑形土器を用いて蒸したものの製法、食感の違いを体験した。また同時に、17日は琥珀玉作り体験を、25日は塩作り（土器製塩）実演・体験を併せて実施した。

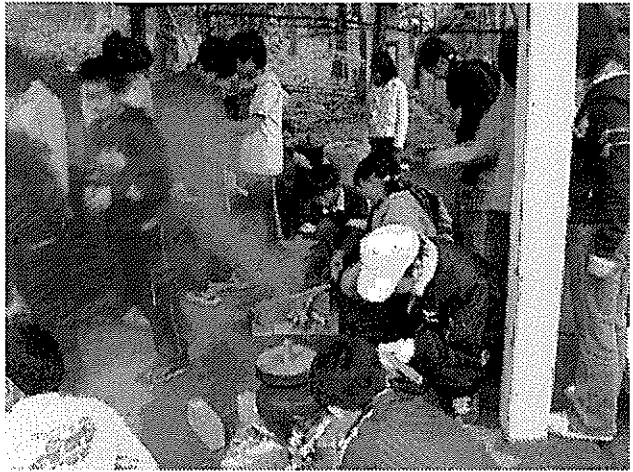


写真10 小学生による食体験

## （2）地域との連携について

地域との連携については、基本的に昨年度と同様で、地元小学校との連携及び一般ボランティアの募集という形態である。とくに栄町立酒直小学校からは全面的な協力を得、一週ないし二週に一度というペースで、合計8回にわたって6年生児童の参加を得ることができた。また、栄町所在の全小中学校の協力で、生徒・児童全員にチラシを配布するなど個人的な参加の募集を行い、さらに北総地域の新聞やミニコミ誌などへの広報を行って、8校12名の小中学生の応募があった。そのうち実際に参加したのは5校8名である。

また、地元自治体である栄町および成田市は当館の活動に常に目を注いで、各種企画について広報等で紹介をいただいている。

## （3）成果物について

歴史的な体験を主眼とした企画であり、成果物は、展示品として弥生時代中期の竪穴住居1棟がある。

#### （４）参加者の反応

小中学生の反応：酒直小学校６年生は総合的な学習の一環として竪穴住居復元と関連体験にかなりの時間数を割いて参加し、作業工程を一通り追うことができたので、原始古代の住まい生活について深い理解を得たようである。この年代の児童は、長時間興味、集中力を持続させることが困難であるが、各参加日ともほぼ半日を作業、体験に充てたにもかかわらず、興味を途切れさせる児童がほとんどいなかった。個人参加の小中学生は、住居復元工程では屋根の茅葺き、関連体験ではモデル屋根の茅葺きと石庖丁作りへの参加が多かった。茅葺きでは専門家（屋根職人）の指導が得られたこと、石庖丁作りは従来の当館や近隣博物館にみられなかった体験メニューであったためと考えられる。いずれも大きな学習効果を得られたと考えている。

一般ボランティアの反応：異口同音に、滅多にできない貴重な体験となったという声が聞かれた。やはり茅葺き工程への参加が多かったが、単なる興味にとどまらず、他でのボランティア活動に生かすことを目的とする人や、建築学の専門家の参加もあった。また、竪穴住居２棟が復元されたことで当館の魅力が増したと考える人が多く、体験学習、観光両面でもっとPRすべきだとする意見が聞かれた。

#### （５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

竪穴住居は、今後は見学及び体験学習の場として活用される。まず、昨年度に復元した古墳時代後期の竪穴住居と併せて、竪穴住居内の諸施設の変化と空間利用の変化を学習する場となる。また、原始古代に関するさまざまな体験学習～土器作り、石器作り、各種装身具作り、土器製塩、火起こし、調理・食体験～は、これまで房総のむら風土記の丘資料館の内外各施設で行ってきたが、それらのうち多くを竪穴住居内または竪穴住居前広場を活用して実施していくことになる。

諸記録は、来年度事業で４月下旬から開催予定のトピックス展「竪穴住居 Part.2」で大きく活用される。また、今年度事業では当館の講座「むらの寺子屋」で「茅葺き」を取り上げ、原始古代から近世近代までの民家屋根技術を講義する中で、今年度の当事業の記録ビデオをも活用している。

当館は、近世近代の町並みや農家などを再現してそこで行われていた生活の技を体験することを核とした「房総のむら」と竜角寺古墳群を中心とする史跡整備と考古資料展示を核とした「房総風土記の丘」という別個の博物館を統合したもので、旧両館の性格の差が大きく不統一感があった。昨年度、今年度と芸術拠点形成事業で復元した竪穴住居は、復元工程の体験という一時的な効果のみならず、再現建物及び体験の場という二つの点で旧両館の性格の差を埋め、原始古代から近世近代にいたる体験型歴史博物館としての存在意義を鮮明にしたといえることができる。